



生活エリートたちの、 ウインドサーフィン・エンゲル係数

interviewed by TOKO
photo by TAKI
取材協力
■アイランドプロス TEL: 03-5311-1287

「福山雅治似、でもしゃべるとちょっとヘンな人」
という噂。福山雅治似はその通り、
でもちっともヘンじゃない。玉にキズ、がない。
こーゆーヒトは困る、書きにくい。

七条敏明さん (28歳O型)

埼玉県立精神保健総合センター
精神科医師

またまたお医者様である。
この連載は始めてまだ7回だが、すでに3名の医師
に登場していただくことになる。
他意はなく、偶然だ。
欧米のウインドサーファーには、パイロットや、IT技
術者など、知的で高収入な専門職に就いている方が多
いと聞く。知的でハードな仕事は、頑健なだけでも、
知能が高いたくでも勤まらない。

ウインドサーフィンが仕事を高める。
仕事がウインドサーフィンを濃くする。
とゆーのが、この連載のコンセプトである。
ウインドサーフィンは、レギュラーサーフィンのように
フィジカルで、ヨットのように知的であるから、
ある種の専門職にとって、とても有益で素敵なホビー
であるのだろう、と例によって我田引水的な文脈だが、
統計を取って見たら、日本のウインドサーファーにも
欧米のような傾向があるかも知れない。

今回の七条さんは、精神科医師である。
紹介してくれた、西荻窪のショップ、アイランドプロス
さんによれば、
「黙っていると福山雅治似、でもしゃべるとちょっとヘ
ンな人」

福山雅治似は福山雅治似でいらしたが、
「しゃべるとちょっとヘンな人」ではなかった。
取材するときは、対象がヘンな人、であるほうが嬉しい。
趣味は映画鑑賞です、と答えられるのと、猟奇殺人
人についての本を集めるのが好きなんだよねー、とで
はどちらが書きやすいか明白だ。
精神科医でエキセントリック、こらオモロイわ、と勇ん
で取材に向かったが、しかしぜんぜんそんなことはな
かった。どこにも、不自然な誇張や、演技的主張とか、
ドラマティックなエピソードがなかった。
福山雅治似のため「絵になる」ので撮影はラクだった
が、インタビューし、文にしてまとめるわしとしてはま
ったく期待はずれだった。
いえ、七条さん、気を悪くなさらないでくださいよ。



■診察室にて。レントゲンのビューアと机と椅子しかない。
注射器も聴診器も特殊な医療機器も何もない。
精神科の診察室がいちばん殺風景なのだという

あくまでわしの邪心的な意味でそうだったとゆーこと
ですから。
どこにもエキセントリックなところがなく、面白みの
ない人はいない。七条さんのなかにもきつと秘密の小
部屋があるはずだ。
たかが1時間のインタビューで自分を見せる人はあ
まりおらず、さらにわしは初対面の方にはまず信頼感
を与えないタイプです。もとい、タイプである。
つまり、七条さんは、こーゆーシチュエーションで、自
分を大きく見せたり面白く見せる必要がない、とゆー
ことなのだろう。すみません、なんかこーゆーかたち
で素人が精神科医師を分析したりしちゃいました)

もし生まれ変わりがあったとして、もしわしが医師に

なることを志すならきつと、精神科を選ぶであろう。
その理由はこうである。
■外科手術する必要がないので、失敗して患者を殺し
てしまうことがなく、歳をくって、手が震えるようにな
っても続けられる。
■泌尿器科や肛門科よりカッコいい。
■脳が脳を診るという意味で文学的で、仕事が面白そ
うだ。
——と、わしは素人考えでそう思うのですが、七条さん
はどのような理由で精神科をお選びになったのですか、
という質問で切り込んだ。

「自分の時間が持てるので」
という答え。



◀ カスタム1枚、
プロダクション2枚
を所有するウェイ
ブライダー。とはい
え「アップ&ダウン
とノーマルジャンプ
くらい」で、フォー
ワードルーパーにな
ることが夢、という。
稲毛にて。今日は
風がない。

↓ マウイ遠征も毎
年の恒例。今年は
なぜが同時多発テ
ロの直後に。カナ
ハもころなしが
空いていた

一般に医師は激務で、たとえば外科医など、重病患者
を手術すれば、予後、ずっと待機せねばならない。
その点、精神科医は比較的、休日にはちゃんと休むこ
とができ、仕事が終わる時間が見えやすい。
ところが、そう甘くはなかった。

精神科医というわしは、映画「レナードの朝」みたい
に、人格者の医師が、カウンセリングで(言葉で)壊れ
た患者を治し、最後に抱き合う、みたいなイメージを
持っていたのだが、もちろん人格的にタフであること
は必要のだが——それはあらゆる仕事でそうだし——
精神科の診療は、とくに文学的ではなく、科学的で、
ケミカルなものだった。
面談による診察をし、脳のあらゆる部位の脳波を計
る。じっさいに見せて貰ったのだが、脳波のプリント
アウトに、脳波スケール(みたいなもの)を当て、幅や
高さの異常を診る。
その他検査結果を総合判断し、脳内ホルモンの異常を
特定し、それを緩和・解消するクスリを処方する。
それが典型的な治療法だという。

精神科医はラクそうでカッコいいと思っていたが、そ
れも違った。
不謹慎な言い方だが、胃や肝臓が壊れた患者よりも、
脳が壊れた患者のほうが難しいはずだ。
七条さんによれば、回復の第一歩は、患者が病気を
「自覚」することという。
自分を病気と自覚していない患者を治すことは、それ
は骨が折れるだろう。
彼が勤める県立精神保健センターは、基本的に県にひ
とつ設置される。この埼玉県の場合、医師が約20名、
ベッドが120床。精神病院としては異例に大きく、ト
ップレベルの治療が受けられるので、民間の病院では
手に負えない患者が移送されることも多く、いきおい
重い——鬱病、分裂病、その他意識障害、てんかん、
アルコール中毒などの——患者が多くなる。
とつぜん頸動脈に噛みつくレクター博士は映画のなか

の話しだろうが、患者が暴れ出すことは希れてはない。
目の前の人間を殺せ殺せという妄言にとりつかれる症
例もあるというし、患者が屈強な男性だったら余計怖
いだろう。精神科医は、危険で命がけの仕事なのだ。

七条先生、1972年、千葉の幕張で生まれた。
父親は歯科医師。中高一貫で昭和大学医学部に進む。
「遊び好きでやんちゃな、ふつうの」少年だった。
学級委員に選ばれるタイプではなく、悪さもひとと
りやった。大学ではスキー部に所属し、大回転やノル
ディックなどの大会にも出場した。
大学4年のとき、
「弟の友人がウインドサーフィンをやるというので稲毛
まで見に行つて、それが始めたきっかけ。
スキーで自信があったのになかなか乗れず意地にな
り、稲毛は自宅から10分と近いこともあってハマリ、
以後、スキーに行く冬以外は、吹けば週末は海、とい
うパターンが続いている。
2年前からは外房の豊海などでウェイブをするようにな
った。県立病院の社宅(3LDKで家賃3万円!)に
置いたグラウンドチェロキーで幕張の実家に帰り、実家
に置いたハイエースで海に向かう。その荷室には
260cmのJPのフリースタイル、260cmのビルフ
ットと250cmのクアトロの2枚のウェイブボード。
セイルは4.0㎡から6.6㎡まで5枚。
腕前は「アップ&ダウンとノーマルジャンプくらい」
マウイにも行く。最近では同時テロの直後に行ったとい
うから、やはり「ちょっとヘン」なのかも知れない。
海には基本的に一人で行く。
「女の子を連れてゆくと、トイレとか機嫌とか面倒」
七条先生、きつと懲りたのですね。
仕事ではストレスをあまり感じないという。
「意識はしていないが、週末のウインドサーフィンが役
立っているのかも」
インタビューとしてはかなり最低の質問なのだが、



仕事、生活に限らず、将来の夢とかビジョンは?
と訊く。
七条先生、とくに無いなあという表情を隠さず、
「まあ、将来は開業して、ウインドはフォワードループ
できるようになることかな」

夢は? という質問は脅迫的なのだ。
男は野心を持って夢を追わなければならないという下
らない風潮がある。夢より大切なのは、いま、実際
に行っている仕事と生活に決まっている。
だから、自信がない男は「夢は?」と訊かれると、ほん
とくは夢が無くても無理に夢を語ろうとする。
——になにか、おもしろいエピソードはないですかね、文
章がおもしろくなるので、と、わしはまたまたインタ
ビューワー失格の質問を重ねる。
先生、マジメに考え込んでくれ、
「……そうですね、職業柄、合コンなどの場で、あぶな
い女が分かることですかね」
職業柄、手首の傷や、不自然な態度、言動などを、無
意識のうちに観察してしまおうらしい。
七条先生、若く、独身で、精神科医で、スポーツマン
で、福山雅治似である。モチないわけはない。
あぶない女に狙われることもさぞ多いと思われる。